論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報告番号	博(医歯薬)甲第 1490 号	氏名	松村　佑介

学 位 審 査 委 員	主　査　　石松　祐二 副　査　　田中　悟郎 副　査　　大西　眞由美

論文審査の結果の要旨

１　研究目的の評価

増加傾向にある非結核性抗酸菌症肺疾患（NTM-PD）の治療は長期の多剤併用療法が必要で、治療後も再発・再感染が多い。そのため完全寛解より、症状改善、健康関連の生活の質（QOL）の向上に治療目標を重視するようになってきた。本研究は、NTM-PD 患者の深刻な問題となっている抑うつ症状について、その有症率、さらにはその症状発現に関連する因子を明らかにすることを目的としており、研究の目的は妥当である。

２　研究手法に関する評価

NTM-PD 患者で研究に同意した対象者に対し、うつ病自己評価尺度（CES-D）を用いて抑うつ症状を評価し、16 点以上を抑うつ症状「あり群」とした。抑うつ症状の有無で 2 群に分け、年齢、性別、罹病期間、血液検査（総蛋白、ｱﾙﾌﾞﾐﾝ、CRP など）、呼吸機能（%肺活量など）、胸部画像所見、呼吸困難感、咳関連 QOL、運動耐容能、睡眠障害などについて比較検討した。さらにステップワイズ二項ロジスティック回帰分析を行い、抑うつ症状の独立因子を検討しており、研究手法も妥当である。

３　解析・考察の評価

上記手法で解析した結果、抑うつ症状を有する比率は 32.5%であった。抑うつ症状「あり群」は、罹病期間、ｱﾙﾌﾞﾐﾝ、CRP、%肺活量、呼吸困難感、咳関連 QOL、運動耐容能、睡眠障害などの項目で「なし群」より有意に不良であった。また、二項ロジスティック回帰分析の結果から、咳関連 QOL と睡眠障害が重要な因子として抽出された。以上の結果から NTM-PD 患者の睡眠障害の評価の重要性について、さらに咳関連 QOL を改善するため咳症状を軽減すための呼吸理学療法の必要性を明らかにした。

以上のように本論文は、感染症患者（NTM-PD 患者）の抑うつ状態に関する研究に貢献するところが大であり、審査委員は全員一致で博士（医学）の学位に値するものと判断した。